1963　昭和３８年１月１日発行　鶴研
雑誌　映画情報　１月号　４頁
国際情報社
見出し［飛車角とメロドラマと］　筆者［由原木七朗］　P1

スタアと共に

飛車角とメロドラマと　えと文　由原木七朗

東映ギャング路線のリーダー・鶴田浩二との夜

由原木　早いもんだね、もう新年号……
加東　お酉様のシーズンが来ると毎年きまったように編集者の悲哀みたいなものを感じるね。
由原木　そして、今年のホープは誰でしょう……というのも例年の決まりで。
加東　そのホープで思い出したけど、今年のホープには、ちょっと毛色の変ったのがあるんだ。
由原木　ほう、それは誰……
加東　鶴田浩二！
由原木　ひえッ！　そりゃ何事だい、天下の鶴田浩二をいまさらホープとは……
加東　だからさ、そこが毛色の変ってるゆえんでね。
由原木　分った、ギャング路線のホープってわけだろう。
加東　その通り。とにもかくにも東映現代劇を今日あらしめたのはギャング映画だし、それも鶴田の出ているギャング映画が絶対というんだからね。
由原木　浩ちゃんの出てないギャング映画はダメか……
加東　まるでダメ。いくらギャング路線といっても、彼が出てるのと出てないのじゃアぐんと興行成績が違うんだな。そこで東映のお偉方もあらためて鶴田の人気を見直し
由原木　芸を見直し……と言ってもらいたいな。
加東　そうか（笑）じゃア正確にいうと芸と人気と金（収入）を見直してだなア……
由原木　どこかで聞いたような文句だなア（もと新東宝社長、大蔵責著に「わが芸と金と恋」というのがある）よかろう、今年のホープは何も新人に限ったことじゃないやね、久しぶりで〝歎きの浩ちゃん〟の歎き節でも聞きに行くか。

ホープは家に妻と三女ありて

加東　等々力の家から、この青山へはどうして引越して来たの。
由原木　この家もいいけどさ、等々力の家ものどかで良かったじゃないの。
鶴田　それがさア、一にも二にも娘のためなんだよ、住む環境はたしかに等々力の方がいいけどねえ、あんな小さな子に往復２時間の通学は酷ですよ。
由原木　それに間もなく二女、三女も同じ運命……
鶴田　そう、親父はひたすら娘のために、せいぜいかせがなきゃアならないし、とすると、ここは便利ですよ。都心の割には静かだし、地の利を得てますからね。それに屋上へのぼれば神宮はすぐ目の下だし、住んでみるとまんざらでもないんですよ…

加東　　この辺は現在都内でも最高に高いらしいね、渋谷松涛町といえば住宅地の一等地だけど、そこよりも高いって話だ。

鶴田　　越して来たばかりの時に、自動車事故をやるし、女房が病気で危うく命を落としそうになったりしてね、こりゃ方角でも悪いのかな……なんて気にしちゃった。でも、等々力に居たんじゃ女房の命は助からなかったものね、かかりつけの病院が遠いから……。そう思って、あまり気にしないことにした。

由原木　そうよ、仕事の方ではトントンと調子よくいって、今年は東映のホープとして大いに売出すんだそうだから。

鶴田　　冗談じゃない、ホープなんてのはこんなフケ（年寄り）に使う言葉じゃない。

加東　　ところが東映では本気らしいよ。ホープっていうのがおかしけりゃ、なんというのかなア、とにかく本年度のだなア、東映の代表スターは鶴田浩二だっていうんだよ。それで今年は鶴田をジャンジャン売りまくるっていうんだから……。

由原木　やっぱり、そりゃホープだよ。

鶴田　　いまね、お二方が見える前にファンレターの返事書いてたんだけどさ、この相手が高校の女学生。うれしいことをいろいろ書いてくれてるんだけど、呼びかけの言葉がいけないね。〝おじさま！〟と来たもんだ。もうお兄さまじゃないんだね。

由原木　当り前だよ。昭和の子供だって三十六才、高校生から見れば大正生れは立派なおじさまだ。

鶴田　　でもね、うれしいよ。ファンレターを貰うっていう気持はね。俺みたいな役者は幾つになっても、ファンレターが来るようでなくちゃアいけないと思うんだ。会社だってそう思っているに違いない。だからファンレターにはちゃんと返事を自分で書くんですよ。

加東　　いい心掛けだね。

鶴田　　そうして置いてさ、ファンを一人でも大事にしておいて、ギャング役いいですよ、刑事役いいですよ、なんでもやりますよ。そうして人気というものをしっかり、しょうあくしていれば、いつか自分のやりたいものを会社でもやらせてくれるんじゃないかしら。

過去は思わず、行く先を見つめ

由原木　やりたいもの……といっても、浩ちゃんはずいぶんやって来ているよ、

加東　　そうね、たとえば現在の東映でも、時代劇と現代劇を何の抵抗もなしにやれるのは浩ちゃんだけじゃないのかな。

由原木　ギャング路線なんて騒いでいるけど、これだって浩ちゃんが松竹からデビューした当時から、ずいぶん手がけているよね。たとえば「獣の宿」「地獄の血斗」東宝でも「夜霧の決斗」はじめ何本かやってる。

加東　　時代劇もデビュー作「遊侠の群れ」をはじめ「弥太郎笠」「佐々木小次郎[1]」「柳生武芸帖」なんてずいぶん多いよね。

---

[1]　「宮本武蔵」で佐々木小次郎を演じた。

由原木　はじめのころの一つの頂点というか、人気が最高だったのは例の美空ひばり共演の「あの丘こえて」だね。映画に舞台に、これは大ヒットして、大阪の実演ではあの騒ぎまで起した（行列に押し倒された女性が死亡）次ぎが「ハワイの夜」あたりかな、これは天才少女ひばりとのコンビを解消して、大人向けのメロドラマとしての一つのピークだよね。

加東　作品としては一連の若旦那ものとか「本日休診」「エデンの海」なんてのもあるけどね。

由原木　歌がいい。「ハワイの夜」なんて灰田の作曲もいいけど、実にいいムードで、正直いって、芝居より歌にホレたね。

鶴田　いやな人だよこの人は、俺は役者なんだからね、歌をほめられてもちっともうれしくない。それどころかかえって腹が立つくらいなのに、それを本人の前でシャアシャアと言うんだから…。

由原木　いや何といっても歌はいいって、「好きだった」「赤と黒のブルース」「サンドイッチマン」みんないいよ。

加東　じゃア本職の方は俺がホメよう。「雲流るる果てに」「日の果て」というのは、あらゆる意味で、浩ちゃんの代表作だと思うけど、どうだろう。

鶴田　意義なし、有難う。あれを認めてもらえれば本望。何もいうことありません。だからねえ、いえ、ですからさ、それを思うとあっしは現在の仕事で満足していられないんですよ。役者は過去に誇りを持っていたって仕方ないと思うんですよ。あるものは現在とそして未来ですよね、キザなセリフだけど、これは真実だと思うんです。ギャングものでも、血が通っていれば文句はありませんが、いまのギャングものはストーリーですよね、それも荒唐むけいの……。痛快さ、スリル、サスペンス、それも必要ですよ、ファンあってのスターですからね、観客の求めているものは大いにやります。でもその中にですね、ほんのチョッピリでもいい。生きている人間の血を通わせることを常に我々は考えていなけりゃア、いけないんじゃないでしょうかね。でないと、現在のようなものばかりだったら、必ず近い将来にあきられてしまいますよ。

メロドラマこそ！　ああ、メロドラマ

由原木　で……、現在やってみたいと思うものは……。

鶴田　ハムフリー・ボガートとバーグマンがやった「カサブランカ」絶対ですねこれは。男と女がこの地球上に生存する限り、ロマンスは無くならないでしょう。とすると、メロドラマは、永遠にくり返される人間の本能ですよ。真理ですよ。スレ違いもメロドラマの一つの型でしょうが、まだまだいくらも人の心を打つものがあるはずです。何年たっても、いつ公開しても、見る人の共感を呼ぶようなメロドラマをつくりたいですね。

加東　「カサブランカ」はそうした作品の一つだというわけね。

鶴田　そうは思いませんか!?

加東　　いや、思いますよ。思いますけどね、今日は聞くのはこっちの役目だから…（笑）
鶴田　　失礼！
由原木　「カサブランカ」のほかには。
鶴田　　「人生劇場」の飛車角。
由原木　ふーむ青成瓢吉とこないところが浩ちゃんらしい。
鶴田　　吉良常にはどうしても月形竜之介さんに来てもらいたいと思ってるんですがね。
由原木　いいね「人生劇場」はいつ読んでも、読む相手次第で何かをそれぞれ感じさせるものを持っているからね。
鶴田　　見事なメロドラマですよ。学生が主人公でも優等生じゃなくて多分に与太ッ気のある者が活躍している。そこに人間的な魅力があるわけですよ。尾崎さんの原作の中に、原作通りで十分ですけど、できればさらに現代的な何か、現代にしか無いものを加えてもいいんじゃないかと思っているんですがね。
加東　　メロドラマを主張しながらちゃんと会社側の注文も容れて考えているあたり、さすが長年のキャリアを持っているだけのことはあるね。
鶴田　　最近はメッキリ酒も弱くなりましてね、体力の限界を悟りましたから、仕事の面でも、いろいろ考えるようになりましたよ。